

# 青年のコミュニケーションと 対人関係に関する意識の検討

— 社会的スキルの観点から —

田 中 孝 志

Examining ways of communicating and developing interpersonal relationships in adolescence in terms of social skills.

Takashi Tanaka

## 問 題

現代青年の対人関係については、近年、その相互作用の表面化を指摘する声が増えるようになってきた。岡田(1995)は、大学生の友人関係の特徴として「互いに傷つけないように気をつかう」、「互いの領域に踏み込まれないように関係の深化を避ける」、「楽しさを求め、一緒にグループでいることを求める」という3つの特徴をあげているし、諸井(1999)も、青年のポケベルやその後の携帯電話によるコミュニケーションへの嗜好性も表面的関係志向性を前提とすれば理解できる現象であると述べている。また、田中(2003)は、大学生を対象に、友人との交流における主導権の取り方や見解の相違が生じた時の対処方略を調査した結果、主導権をあまり積極的に強い形では握ろうとしないこと、見解の相違の解決にあたっては、友人の見解を変更させようとする試みは非常に少なく、できるだけ友人と自分の見解が両立する方策を求めるが、必要なら自分が折れて友人関係の悪化を防ごうとする傾向があることを見いだしている。

このような青年の対人関係における表面的関係志向性を対人的スキルの視点から論じる意見が出されている。たとえば、長田(1994)は、青年は表面的に

は円滑な対人関係を維持し、一見良好な関係が形成されているように見えるが、これは真の意味で良好な人間関係が形成されているのではなく、彼らの対人スキルの水準が不十分であるために、友人との距離を置くことによって軋轢が生じるのを防いでいると主張している。

また、対人関係における表面的関係性に対置する概念としては、親密な対人関係の形成をあげることができる。それに関連して、友人関係の親密化過程を取り上げた Duck(1991)は、友人関係の親密化の段階ごとにそれぞれ異なった社会的スキル(対人的スキルとほぼ同義)が必要とされることを明らかにしているし、大学生の恋愛における社会的スキルの役割を調査した堀毛(1994)も、恋愛関係の進展につれて、男女ともに社会的スキルが変わっていくことを明らかにしている。これらの結果は、視点を変えると、表面的な人間関係においてはそれほど高度な社会的スキルが必ずしも必要とされないこと、あるいは低水準の社会的スキルでは親密な関係性へと対人関係を発展させることが困難であることを示唆している。

諸井(1999)も指摘するように、現段階においては、青年の対人スキル(社会的スキル)の低下は「作業仮説」の段階であるが、同時に、対人スキル(社会的スキル)の低下による対人関係の表面性を仮定すると理解可能な現象が多く報告されているのも事実である。

そこで、本研究では、青年の対人スキル(社会的スキル)の水準の高さが検討されるとともに、彼らが対人関係や対人コミュニケーションについてどのような意識をもっているかが検討された。ここで、対人関係への意識性や対人コミュニケーションへの意識性が検討の対象とされたのは、それらが大坊(1998)も指摘するように、社会的スキルの中核をなす構成要因に深く関わっているからであり、対人スキル(あるいは社会的スキル)の進化は「社会の中の個人」としての自覚あるいは対人関係の重要性の認識があってはじめて可能になることであるし、そのための最も中核的な手段としての対人コミュニケーションの重要性の自覚が必要になるからである。

## 方 法

**調査対象者** 大学生 112 名（女性 80 名，男性 30 名，性別不明 2 名）が質問紙調査に参加した。うち，女性 2 名は，完全記入が必要な尺度の一部の項目に記入漏れがあったために除外されたので，最終的な対象者は女性 78 名，男性 30 名，性別不明 2 名の合計 110 名であった。調査対象者は大学 2 年生が主で（90 名），そのほかに 3 年生 11 名，4 年生 7 名，学年不明 2 名であった。年齢範囲は 18 歳～23 歳，平均年齢は 20.1 歳であったが，その内訳は，18 歳 1 名（女性），19 歳 29 名（女性 24 名，男性 5 名），20 歳 53 名（女性 42 名，男性 11 名），21 歳 16 名（女性 8 名，男性 8 名），22 歳 4 名（男女各 2 名），23 歳 5 名（女性 1 名，男性 4 名）であった。なお，性別不明者は，学年と年齢も同時に記載がなかったので，この内訳には含めていない。

**材料** 社会的スキル尺度（KiSS-18）18 項目（菊池，1988），青年の対人コミュニケーションおよび対人関係に関する意識についての質問 12 項目の合計 30 項目からなる質問紙が用いられた。

社会的スキル尺度（KiSS-18）は，菊池によれば，若者にとって必要な社会的スキルを測定するためのものであり，「初歩的なスキル」，「高度のスキル」，「感情処理のスキル」，「攻撃に代わるスキル」，「ストレス処理スキル」，「計画のスキル」という 6 種のスキルを含むものであった。回答は，「いつもそうでない」を 1 点，「いつもそうだ」を 5 点とする 5 段階尺度で求められ，合計得点が高いほど社会的スキルが高いと判定されるものであった。

一方，青年の対人コミュニケーションおよび対人関係に関する意識についての質問は以下の 12 項目であり，項目 12（自由回答）の場合を除くと，いずれも「まったくそう思わない」を 1 点，「全くそう思う」を 5 点とする 5 段階尺度上で回答を求めるものであった。

- (1) 友人とのコミュニケーションにおいて最も大切なことは情報を正確に相手に伝えることである。
- (2) 友人とのコミュニケーションにおいて最も大切なことは，お互いにそれを楽しむ

ことができるようにすることである。

- (3) コミュニケーションする時には，少しぐらい無駄があっても，相手が誤解することがないようにメッセージを伝えようとする。
- (4) 友人と話すときには相手の表情やジェスチャー，姿勢など，ことば以外の要素にも注意を払っている。
- (5) 相手の表情やジェスチャーなどから，相手の本当の考えを理解することに自信がある。
- (6) ゼミや講義の時に，自分の調べたことを相手が理解できるようにことばで伝達する自信がある。
- (7) 自分の気持ちを伝えようとする時には，ことばよりも態度や行動で示すほうが好みである。
- (8) 友人との対人関係をうまくやっていくことは自分にとって最も重要なことのひとつである。
- (9) 自分のしたいことは，友人との対人関係が損なわれる可能性があってもするほうである。
- (10) 友人とコミュニケーションするよりも自分一人のできること（読書など）を行う方が好きである。
- (11) 親や教師など友人以外の人とのコミュニケーションも大事であると思う。
- (12) 「コミュニケーション」ということばから真っ先に連想するものは何ですか。下の（ ）の中に書いてください。

質問紙には，上記の 30 項目以外に調査対象者の年齢，学年，性別を記入する欄が設定されていた。

**手続き** 調査は，正規の講義の最終回に無記名の任意調査として実施された。調査の目的は，大学生のコミュニケーション行動とそれに対する考え方を知ることであると教示され，任意調査であるので，協力の意思のある人だけが回答すればよいこと，回答が提出されない場合も何ら不利益はないことが教示された上で，質問紙が配布された。配布は，受講生が講義終了後，講義室を退室する際に封筒に入れられた質問紙を任意に持ち帰るという形式で行われた。質問

紙に回答する意思のある人は、1週間後までに回答済みの質問紙を再度封筒に入れて所定の回収場所に持参し、提出するように求められた。また、配布当日の授業に欠席した少数の受講生に対しては掲示によって調査の実施と協力の呼びかけが行われ、それに応じた人に対しては上記と同じ手続きで質問紙の回収が行われた。全体の回収率は89.6%であった。

## 結果と考察

**社会的スキル得点** KiSS-18の18項目の合計得点である。5段階尺度であるので、理論的には18点～90点の得点分布をするが、菊池(1988)によれば、大学生男性の平均値は56.40で、標準偏差は9.64、大学生女性で平均値が58.35、標準偏差が9.02というデータが得られている。この値は成人男女より少し低く、高校生より少し高いという位置づけになっている。

本研究で得られた結果によれば、大学生男性の平均値が59.93、標準偏差が9.00であり、大学生女性の平均値が59.13、標準偏差が8.26であるので、菊池(1988)のデータより男女とも少し高い得点になっている。また、最小値と最大値は、男性でそれぞれ45と77、女性でそれぞれ40と80となっており、女性の方が少し範囲が広いが、これは女性が78名で、男性が30名という人数の違いによるものではないかと思われる(ただし、標準偏差で見ると、女性のほうが男性よりもデータ全体としてはばらつきが少ない)。

KiSS-18得点の性差を検討するために、性別を要因とする一要因分散分析が行われたが、有意差は認められなかった( $F(1,106)=.196, p>.10$ )。このことは社会的スキルの水準は性別によって左右されるものではなく、個人差として扱われるものであることを示している。

**分析の要因と質問の分類** 上記のように今回の調査対象者のKiSS-18得点による社会的スキルは平均的には中程度の水準にあるといえるが、社会的スキル水準の高さが青年の対人関係やコミュニケーションについての意識とどのような関係をもっているかを分析するためにKiSS-18得点によって社会的スキル上位群と下位群が設定された。社会的スキル上位群はKiSS-18得点が63点以上の者32名(女性21名、男性11名)、下位群はKiSS-18得点が55点以下の

者32名(女性22名、男性10名)によって構成されていた。上位群・下位群設定の基準は、KiSS-18得点の上位1/3および下位1/3であったが、基準になる得点に同点者が複数いたので、上位群の場合には1点上、下位群の場合には1点下で線引きをした結果、上記のような群が設定された。また、分析にあたっては、従来の対人コミュニケーションの研究においてしばしば性差が見いだされていることから、社会的スキルの水準の要因とは別に性の違いが要因として組み込まれた。したがって、分析は2(群)×2(性)の4条件からなる2要因計画に従って行われた。

今回の調査で用いられた質問は、自由記述式の回答を求める質問12を除いて、すべて5段階尺度での回答を求めるものであったが、それらの11の質問は大別すると3つのグループに分類することが可能である。コミュニケーションの目的についての意識に関するもの(質問01, 02, 03)、コミュニケーションの方法についての意識に関するもの(質問04, 05, 06, 07)、対人関係についての認識に関するもの(質問08, 09, 10, 11)の3分類である。これらの質問への回答結果は表1にまとめて示されている。

表1 質問01～質問11に対する回答の各条件ごとの平均値

	上位群		下位群	
	女性	男性	女性	男性
質問01	3.33(.86)	3.55(1.04)	3.36(.95)	3.10(.99)
質問02	4.29(.90)	4.09(1.22)	4.27(1.03)	4.10(1.20)
質問03	4.05(.74)	3.82(.98)	4.18(.73)	3.60(1.17)
質問04	4.38(.86)	4.00(1.18)	4.14(.99)	3.40(1.17)
質問05	3.33(.86)	3.73(.79)	3.14(1.28)	3.20(.79)
質問06	3.05(.97)	3.73(.79)	2.27(.46)	2.30(.67)
質問07	3.48(.93)	3.00(1.34)	3.59(1.05)	3.10(.99)
質問08	4.57(.51)	4.55(.69)	4.23(.87)	4.00(1.15)
質問09	3.10(1.30)	2.55(1.04)	2.68(1.25)	2.60(.84)
質問10	2.71(1.15)	2.36(.81)	3.05(1.00)	3.30(.95)
質問11	4.62(.50)	4.64(.50)	4.27(.63)	4.10(.32)

注：( )内の数字は標準偏差

**対人コミュニケーションの目的と社会的スキル** 質問01では、友人とのコミュニケーションにおいて正確な情報伝達が最も大切であるという見解への同意度が検討された。各条件の平均値は3.10～3.55であり、積極的な同意も否定も得られなかった。2(群)×2(性)の2要因分散分析の結果、どちらの要因の主

効果も交互作用も認められなかった。質問 02 は友人とのコミュニケーションの目的において楽しむことを主眼とする見解への同意度を検討するものであったが、これへの回答は平均値が 4.09~4.29 であり、質問 01 への回答より全体的に同意度が高いといえるが、2 (群) × 2 (性) の 2 要因分散分析の結果では主効果も交互作用も認められなかった。質問 03 はコミュニケーションのメッセージは冗長であっても相手の誤解を招かないものであることが大切であるという見解への同意度を検討するものであった。これへの回答は 3.60~4.18 の平均値で示されており、同意の程度は、質問 01 への回答と質問 02 への回答の間に位置するものであった。これについても 2 (群) × 2 (性) の 2 要因分散分析が実施されたが、その結果、有意な効果は認められなかったものの、性の主効果に関して、女性の同意度が男性のそれよりも高い( 4.12 対 3.71)という傾向が認められた(  $F(1,60)=3.142, .05 < p < .10$ )。

これらの結果は、青年の対人コミュニケーションの目的に関する意識が、正確な情報伝達に力点を置くというよりも対人関係の維持や対人関係から得られるものを楽しむという側面に強調点が置かれたものであることを示している。ただ、そのことに関して社会的スキルの高さは直接的な影響は及ぼしていないように思われる。

**コミュニケーションの方法に関する意識と社会的スキル** 対人コミュニケーションは、言語的・非言語的チャンネルの両方を用いて行われるが、それぞれへの好みや自信が社会的スキルの水準とどのように関係するかが検討された。

質問 04 では、友人とのコミュニケーションにおいて、相手の意図の解読に際して非言語的チャンネルに注意を払う程度が検討されているが、下位群の男性の平均値が 3.14 であった以外はいずれも 4 点台の平均値が示されており、コミュニケーションにおける非言語的メッセージの重要性にある程度着目していることがうかがえる。群と性の 2 要因分散分析の結果、群の主効果や交互作用は有意ではなかったが、女性(4.26) > 男性(3.71)という性の主効果が有意であった(  $F(1,60)=4.258, p < .05$ )。コミュニケーションの解読能力に関しては、女性が男性を凌ぐことを指摘する研究は多いが、ここでの結果はそのような女性の非言語的メッセージ解読の能力の高さが非言語的側面への意識的注意の強さによ

て支えられていることを示唆しているといえよう。また、社会的スキルの水準の主効果は認められなかったが、これは上位群(4.25)と下位群(3.91)がどちらもある程度非言語的チャンネルへの高い意識性をもってたたためと考えられる。

質問 05 は非言語的メッセージの解読能力に関する自信を尋ねるものであったが、上位群の男性(3.73)を除くといずれも 3 点台前半の平均値を示しており、社会的スキルの水準や性別に関わらず、青年が自らの解読能力に特別には自信をもってはいないことを示している。群×性の 2 要因分散分析によっても有意な効果は見いだされなかった。

質問 06 は、言語的な説明能力(これは、解読能力と対比して表現すると、記号化の能力と言えよう)に関する自信を問うものであったが、これに関しては群の主効果が有意であり(  $F(1,60)=30.496, p < .01$ )、性の主効果は有意ではなかったものの傾向は認められた(  $F(1,60)=3.143, .05 < p < .10$ )。群の主効果については、上位群の平均値が 3.28 であるのに、下位群の平均値が 2.28 であることから、社会的スキルの高い群が言語的説明能力に強い自信をもっているというよりも、社会的スキルの低い群の自信が低いために生じたものと思われる。また、性の主効果が有意には達しなかったものの、女性(2.65) < 男性(3.05) という傾向が示されており(  $F(1,60)=3.143, .05 < p < .10$ )、このことは男性が言語的側面に、女性は非言語的側面に重点を置いたコミュニケーションを行う傾向があることを示唆するものと考えられる。このような傾向は質問 07 の分析においても見だされている。

質問 07 は、青年が、自分の気持ちの伝達において言語的手段と比較して非言語的手段を好む程度について尋ねたものであるが、群と性の 2 要因分散分析の結果、性の主効果に傾向が認められている(  $F(1,60)=2.929, .05 < p < .10$ )。女性は、平均値が 3.53 で、非言語的手段への好みをある程度自覚しているのに対して、男性は、平均値は 3.05 であり、少なくとも自覚的には非言語的手段への好みをもっていないといえよう。

**対人関係の意識と社会的スキル** 質問 08 から質問 11 までの 4 つの質問に対する回答がこれに関連した内容をもっている。

質問 08 は、自分にとっての友人との対人関係の重要性に関する意識を尋ね

たものであるが、群と性の2要因分散分析の結果、群の主効果が有意であった( $F(1,60)=4.431, p<.05$ )。性の主効果および交互作用は有意な水準に達しなかった。この結果は、上位群が下位群よりも対人関係をより重視している意識を示しているが、注意すべきは下位群でさえ平均値が4.16と対人関係重視の姿勢を示していることであり、上位群はそれにも増して友人との対人関係が自分にとって重要であると思っていることになる。

質問09は、自分の欲求実現と対人関係の喪失の相対的重要性に関する判断を求めたものであるが、群と性の2要因分散分析ではいずれの要因も有意な効果を示さなかった。平均値が、上位群の女性の3.10を除くと、いずれも2点台であることを考慮すると、社会的スキルの水準や性別に関わりなく、どちらかといえば、自分の欲求実現よりも友人との対人関係の喪失に否定的な傾向があるといえよう。

質問10は、友人とのコミュニケーション、すなわち対人的な活動と自分一人で行う活動の相対的好みを尋ねたものである。群と性の2要因分散分析の結果、群の主効果が有意であった( $F(1,60)=5.485, p<.05$ )。性の主効果および交互作用は有意ではなかった。このことは、社会的スキル水準の高い者は、低い者と比較して、自分一人の活動より友人とのコミュニケーションを好むことを示している。

質問11は、親や教師とのコミュニケーションの重要性に関するものであったが、群と性の2要因分散分析の結果、群の主効果が有意であった( $F(1,60)=9.821, p<.01$ )。このことは、社会的スキル水準が高い者が低い者よりも親や教師とのコミュニケーションを重要と考えていることを示しているが、同時に社会的スキルの低い群でさえ4.22という平均値を示していることを考慮に入れると、青年はいずれにしても親や教師とのコミュニケーションを重視しているが、社会的スキルの高い者はその姿勢が非常に明確であると言うのがより適切な言い方であろう。

「コミュニケーション」によって最優先に連想されるイメージ これは質問12に対して自由記述式による回答を求めたものである。複数の内容を記述したものが少数あったが、この場合には、質問文の表現は「真っ先に連想するものは

何か」であったので、最初に記述された内容によって分類された。上位群と下位群に属する64名の回答について分類したところ、「会話・言語」が22名と最も多く、次いで「人と人との関係」などの対人的関係性に言及したものが18名、「意思伝達」などのコミュニケーションの目的に関連する内容が11名という順序であった。その他には、コミュニケーションの意義や属性についての言及、コミュニケーション相手としての友達に言及したものが各3名、その他(笑顔、電話)が2名で、記載もれが5名という結果であった。これらの結果から、コミュニケーションは、言語的なイメージが強く、また対人関係の維持・展開の手段として考えられていることがうかがえる。

**まとめ** 社会的スキルの概念は、対人関係の中で円滑に機能していくための技能の総称であり、その意味では対人スキルという概念とほぼ同義であるが、社会的スキルを構成する要素の詳細については必ずしも統一的な見解があるわけではない。しかし、中核的な要素が対人関係の認知や調整、およびコミュニケーションであることについてはほとんどの見解において一致が認められている。本研究においては、菊池(1988)の作成したKiSS-18という社会的スキル尺度を用いたが、この尺度も6種類の構成要素として上記の特性を充足している。

本研究における検討の結果、現代青年の社会的スキルの水準は、菊池(1988)が尺度を作成した16年前と比較してあまり変化しておらず、理論的には18~90点の分布が可能な社会的スキル尺度の得点の平均値が59点台であることから、平均的には中程度の水準にあることが明らかになった。このことは、現代青年の社会的スキルが十分であるとはいえないものの、「低下している」ともいえないことを示している。

現代青年は、コミュニケーションを正確な情報伝達よりも対人関係の維持や対人関係から得られるものを楽しむという側面に強調点をおいて考えていることが明らかになったが、このことについては社会的スキルの水準は関連がなかった。社会的スキルの水準は、それが低い場合に言語的説明能力への自信のなさにつながること、また、社会的スキルの高い人は、それが低い人以上に友人や親あるいは教師との対人関係を重視する気持ちが強いことなどによって社会的スキルの水準の高さの意義を示しているといえよう。社会的スキルが高いこと

がこのような意識を高揚させるのか、あるいは対人関係の重視意識が強く、言語的説明能力への自信があることが社会的スキルを向上させるのか、その方向性は必ずしも明らかではないが、両者に関連があること自体が重要であると思われる。

また、社会的スキルは、それがスキル（技能）である以上、先験的なものではなく、学習や訓練によって向上させることが可能なものである点が青年の対人関係を考える時、重要なポイントになるといえる。

本研究の結果は、対人関係の展開において社会的スキルの水準とともに性差の影響も考慮されなければならないことを明らかにした。女性は、男性に比較して、非言語的コミュニケーションに重点を置き、またそれを好むことが明らかにされた。また、女性は有意な効果ではなかったもののコミュニケーションにおいて相手の誤解が生じないことに配慮する傾向があることも示された。女性と男性の間の、このようなコミュニケーションについての対応の違いは、両性の間の対人関係やコミュニケーションが誤解なく、円滑に進められるためには十分に理解されるべきものであると思われる。

## 引用文献

- 大坊郁夫 1998 しぐさのコミュニケーション——人は親しさをどう伝えあうか——サイエンス社
- Duck, S. 1991 *Friends, for life: The psychology of personal relationships, second, revised edition*. Harvester Wheatsheaf. 仁平義明（監訳）1995 フレンズ——スキル社会の人間関係学——福村出版
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34(2), 116-128.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 諸井克英 1999 現代青年のコミュニケーション 諸井克英・中村雅彦・和田実（著）親しさが伝わるコミュニケーション——出会い・深まり・別れ——第6章 Pp.189-217. 金子書房
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心

理学研究, 43, 354-363.

長田雅喜 1994 仲間・家族と現代青年 久世敏雄（編）現代青年の心理と病理 Pp.111-123. 福村出版

田中孝志 2003 大学生の家族・友人観とその社会的行動に関する研究 西南学院大学教育・福祉論集, 2(2), 1-20.

西南学院大学文学部児童教育学科